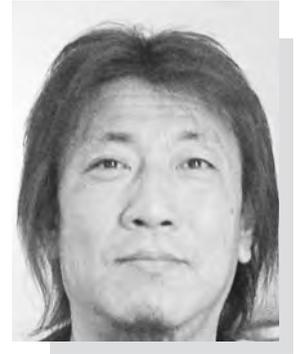


巻頭言

シカと緑化

中島 敦司



2015年、自然公園内における緑化施工は基本的に「地域に起源を持つ植物」の使用だけに限定するという指針が国から出された。筆者の所属する日本緑化工学会が1990年代から取り組んできた地域性種苗緑化が社会で認められることになった。その背景には、生物多様性を脅かす外来種問題があった。

緑化で多用される外来種牧草は、本来、家畜のエサである。当然のことだが、日本の草食性の野生動物にとっても好物となる。日本の開発は、今では深山つまり野生動物の生息範囲にまで及んでおり、そこでの外来種牧草の緑化は餌場の造成と同じ意味を持つ。近年、農作物などへのシカ害が社会問題になっているが、緑化工事は、結果的にシカの餌場を造ってしまった。しかも、シカに被害されて植物を失った法面は、徐々に表層が崩れてしまい、防災機能を減じてしまう。今では、緑化がうまくいかない理由の上位にシカ被害の影響がある。

シカが好まない不嗜好性植物もある。灯台下暗しではないが、その多くが在来植物であり、地域性種苗緑化は生物多様性保全の効果だけでなく、シカ害に強い緑化でもあった。考えてみれば分かるが、在来植物が身近な植物として存在しつづけられた理由には、野生動物に食べ尽くされなかったということがあったわけだ。近年、シカが増えていると言われるが、それは、明治末期～昭和末期にかけての狩猟や森林の過剰利用による餌場の消失、その後影響による「激減期」からの回復であって、江戸時代よりもまだ少ないレベルだ。その回復を助けているのが、外来種牧草による緑化であった。

シカの不嗜好性植物の中で、緑化に用いやすい植物としては、ススキやチカラシバが挙げられる。いずれも、珪酸を多く含み、硬いために不嗜好となっているとみられる。ノコンギクも使える。もちろん、エサが極端に少ない場合には、ススキだって食われてしまうが、多くの場面で食べられずに済む。

ところが、在来植物の種子は普通に流通していない。このため、在来植物緑化が求められた場合に、例えば

中国から輸入した在来植物と同じ名前を持つ植物が使われた。ススキ、ヨモギなどがその代表だ。しかし、例えば中国ススキなどは日本のススキとは完全に別種で、後になってヨシススキという別の名称が与えられた。仮に同種であっても、遺伝子攪乱の問題がある。やはり、地域性種苗緑化は、その地域に起源を持つ植物でないとはダメで、地域で採種した種子などを使うことが原則である。地域で採種したタネから増やしたものを使う場合もあることから「起源を持つ」という表現になる。

地域性種苗緑化を事業ベースにまで育てるためには、種子供給までを含めた一連のシステム構築が必要である。このため、地元の産官学が協働して「わかやま地域植物研究会」を立ち上げ、山村の耕作放棄地などからタネを採種する事業、研究に着手した。耕作放棄地には大量の「お宝」が眠っており、経済が冷え込んだ山村での新しいビジネスにもなり得ると期待している。

貴重なタネを有効的に使用するためには、適期に播種したい。しかし、緑化工事の多くで不適期での播種が余儀なくされる。これを解消するため、竣工後の管理段階における「適期での後蒔き」ができないかと発想したが、道路などで交通制限せずに効率的に後蒔き作業を実施するためには軽装工法である必要があった。このため、「わかやま地域植物研究会」では、後蒔き専用の軽装播種機を独自開発するに至った。現在は、試験施工も終了し、モニタリングの結果を受けての改良作業中である。

高度経済成長期から始まった外来種牧草による緑化は、当時の社会事情の中では成果を得た。しかし、時代の変化により中身を変える必要が生じている。緑化研究の重鎮である山田守博士は「外来種牧草は、戦後の給食を支えた粉ミルクのような存在で、いつまでもしがみついているのはダメだ」とおっしゃっていたが、正にその通りであろう。